防災まちづくりの会だより

道路部会の点検会

道路部会では、地区内の主要な道路を、ふだんから使いやすく、災害時にも活動しやすくするために、電柱の移設などを関係機関に要望しています。昨年は池二小と池袋中の東側の道などを点検し、その結果を東京電力などに要望して２ヶ所の電柱移設を実現しました。今年は鎌倉街道など池袋本町二・三丁目の道路を対象として、10月16日に点検を行いました。

点検の結果、通路を塞ぐように電柱や外灯が立っているところや、道路のすみきり部分に電柱があって曲がりにくいところ、電柱が道路に飛び出しているところなど、いくつかの問題箇所が見つかりました。

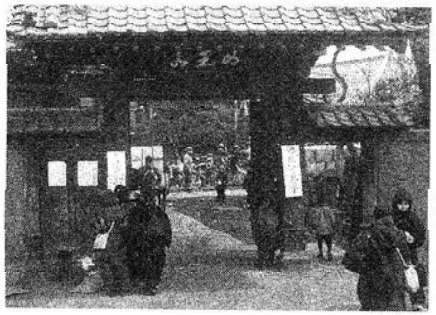
道路部会では今回の結果をとりまとめ、東京電力やＮＴＴ、豊島区などに対して要望書を提出する予定です。

まちの歴史　空襲と池袋本町

1944（昭和19）年８月、アメリカ軍によりグァム・サイパン島が占領されると、日本は本土空襲の危機にさらされることになりました。配備されたばかりのアメリカ軍Ｂ-29爆撃機の航続距離内に日本全土が覆われ、度重なる空襲にさらされることになります。

豊島区は、1944年12月12日の初空襲から数えると10回の空襲にみまわれています。それらの犠牲者を総計すると死者941人、負傷者3952人、被害者16万9392人、罹災家屋４万956戸に及びました。中でも1945年４月13日の空襲では、豊島区を含む東京北西部に対して焼夷弾爆撃が行われ、豊島区では死者778名、負傷者2523名、被害者16万1661名、罹災家屋約３万4000戸という被害を生じさせました。

我が池袋本町もこの時の空襲で、ほぼ全地域が焼き尽くされました。ごく一部、重林寺より谷端川までの地域が免れたのみでありました。人々は、大火災が発生する中で、家族の死亡や負傷者を抱え、家を失い、逃げ惑いながら、身の危険からどのように対処していったのでしょうか。当時、川越街道沿いにあった池袋警察署も焼失し、一時重林寺に移されたそうです。また、アメリカ軍のＢ-29爆撃機は日本軍に打ち落とされ、本町の二ツ又付近に墜落していたという事です。多くの住民は、板橋、練馬方面へ川越街道を避難していったということです。



重林寺

省線池袋駅

戦争と天災は、原因が大きく違いますが、住民にとっては間違いなく大災害でありました。当時を経験し、生き抜いたお年寄りが身近に居られます。お話をお聞きすることにより、本町地域の特徴と重ね合わせ、災害に対する貴重な提言が多々あるのではないでしょうか。（市川）※写真は豊島区郷土資料館「戦争と豊島区」より

がっこう訪問①　池袋第二小学校　永瀬校長を訪ねて

ますます大切にしたい……地域と学校の結びつき

今回から始まる新シリーズ、がっこう訪問です。第１回の今回は、防災ひろばの暫定利用にも積極的な、池袋第二小学校の校長先生をお訪ねしました。地域と学校の関わりについて、学校の新しい取り組みやひろばへの期待をお話いただきました。

地域なしでは語れない

校長先生は、「今、教育は地域なしでは語れなくなってきている」、「特に小学校の教育は地域との関わりがとても大事だ」とおっしゃいます。これまでのように、学校で先生だけが教えるのではなく、まちのいろいろな人が関わってくれて、いろんな人の生き方を子供が学び、「大人ってすごいな」と感じ、「私はあんなふうになりたいな」とか「こんなふうになりたいな」と子供たちが感じられる教育が必要になっているのです。そのモデルを示してくれるのはやっぱり「地域の人」だと言われます。これはまさに、実践から生まれた裏づけのある重みのある言葉でした。

地域と関わりながらの総合的な学習を通して、普段の生活の中でいろいろな人が育ててくれていることを子供たちが感じてくれるのではないか、このことは、子供の健全育成につながり、「まちづくり」の第一歩になるのではないかと熱っぽく話してくださいました。

地域に学ぶ総合学習

今、小学校では「総合学習」という時間が設けられ、各学校ごとにさまざまな試みがなされています。池二小での高学年の総合の時間数は、年間70時間。週に２時間もあり、来年度はもっと増えるそうです。その時間を使って、いろいろなことを学びます。例えば、４年生の環境学習では、ダンボールやペットボトルのリサイクルが、まちのお店ではどのように行われているのか、事前に学習の時間を設けて、子供たちに意識付けして、それからまちに出て実際を見てこさせます。子供が行って、見ておしまいになってしまうことのないように、それをまとめる作業まで組んでいるそうです。先生のほうからの動機付けはあるにしても、自分たちで考えて、見て、確かめてまとめるという作業は、必ず子供たちへのフィードバックがあり、まさにこれは学習だと感じ、子供たちの将来に希望が持てるお話でした。

６年生の「レッツトライ池袋本町」という教科では、まちの中で自分が出来ることを考えて、本町公園や重林寺の掃除をする子や、自分は将来美容師になりたいからパーマ屋さんでお手伝いできることをやらせてもらう子もいるそうです。この基本は「物事を総合的に大きく捉えて考えよう」ですが、身近な足元のことが判っていないと、大事な地球環境のことも空論になってしまうので、自分の生活しているところの地元を勉強することが良いのではないかということになったそうです。教育の現場で、職業だけではなく、ボランティアも併せて体験させることで、自由にやっていいことと、社会規範として身に付けなければならないことや、やらなければならないことの判断力が培われていくことを位置付けての考えは、まさに教育のあるべき姿だとも感じました。

活用される防災ひろば

本町防災ひろばでは、文成小と共に学校園を作っていますが、５年生が田んぼを作って「米づくり」をしました。ブルーシートで防水しただけの小さな田んぼに、トンボが生まれ、放流したメダカが泳いでいました。原っぱにはバッタがやってきて、子供たちにとってはとてもいい教材になっていると喜んでいただきました。

できれば、来年も子供たちの手づくりの田んぼやビオトープをつくり、自然のたくましさや生態系の豊かさを目の当たりにできる場所をつくりたいとおっしゃっています。

今年、水田に放した日本メダカは、今は職員室の前の水槽で冬を越しています。来年は「めだかの学校」に出会えるかも。楽しみです。

（取材：青山・舟久保）